

(4) 関連する墓所・寺院

近世の京極家は、高次が小浜藩主となった後、忠高が松江、高和が龍野から丸亀へと移封されたため、徳源院のほかにも領国であったそれぞれの地に墓所を構える場合があった。また、江戸にも墓所を構えている。

ここでは、近世以降の京極家当主の墓所として現存している代表的な場所のみを取上げた。

①安国寺（松江）

忠高が松江城下で菩提寺とした寺院の1つで、高次の供養塔があるほか、忠高の位牌が安置されている。

高次の供養塔は宝篋印塔であり、京極家墓所にある高次の石廟と同じく笏谷石で造られている。京極高次供養塔として平成16年（2004年）に松江市指定文化財に指定されている。

文政元年（1818年）には、安国寺住持から丸亀京極家宛てで京極氏の廟所代参を求めた差出が残されている^{※1}。

②玄要寺（丸亀）

京極家が松江・龍野・丸亀と移封されるに伴って移転されてきた寺院であり、忠高の法号（玄要院殿天慶道長大居士）をとって名付けられている。

玄要寺には丸亀藩6代藩主で、明治7年（1874年）に没した高朗の墓所が営まれている。高朗は嘉永3年（1850年）に家督を朗徹に譲って隠居し、明治維新後も丸亀に住した。高朗の墓は土塼で区切られた墓域内に石垣を築いて玉垣を設けた中に墓碑がある。昭和53年（1978年）に京極高朗墓所として丸亀市指定史跡に指定されている。

高朗のほか、多度津藩の2・5代藩主の墓がある。

③光林寺（東京）

京極家が江戸に構えた菩提寺であり、藩主の室や高和の養子、江戸で亡くなった多度津藩の初・4代藩主の墓がある。

明治維新によって東京へ移住した朗徹以降の当主は、光林寺に墓所を営んでいる。

④龍光寺（東京）

江戸での菩提寺の1つであり、丸亀藩3～6代の室や世子などの墓がある。

瀬山登の手記「心の枝折」には、高美が病に伏せてから龍光寺に埋葬されるまでの記録がある。



[写真2-1] 玄要寺 京極高朗墓所
(丸亀市指定史跡)
(丸亀市ホームページから)



[写真2-2] 光林寺



[写真2-3] 光林寺 丸亀藩初代室・
2代目室・世子墓

※1 西島太郎「京極氏菩提寺の形成と変遷」早島大祐編「中近世武家菩提寺の研究」小ざり社、2019年による。

第3節 沿革と史料

第1項 沿革

(1) 京極氏の系譜

京極氏は、宇多天皇から続く佐々木源氏であり、佐々木信綱が4つの分家を立てたうちの1つである。京極氏の始祖となる氏信は、信綱の四男であり、承久2年(1220年)に生まれた。信綱の所領のうち、近江国の愛智・犬上・坂田・伊香・浅井・高嶋の江北六郡の土地、京都の高辻京極の居邸などを譲り受け、京極氏を称した。

氏信の4代後の当主である高氏は、法名を道誉と号し、足利尊氏に仕えて立身した。高氏の代には、京極家は山名・一色・赤松と並び、室町幕府の四職に列した。中世には、家督争いなどによって一時は衰微するが、戦国期に至って高次が豊臣秀吉の配下となり、大名となった。高次は、慶長5年(1600年)の関ヶ原の戦いでは東軍に属して大津城で籠城したが、西軍の攻撃を受けて開城し、高野山に出家した。戦後、若狭小浜に封ぜられ8万石を領した。高次の跡を継いだ忠高は、後に出雲と隠岐の二か国24万余石を領したが実子がなく、寛永14年(1637年)に没した。忠高の甥・高和が跡を継ぐことを許され、出雲・隠岐から播磨龍野へ減封となった。万治元年(1658年)には讃岐丸亀へ転封となり、以後、丸亀で明治維新を迎えた。

(2) 清瀧寺の創建

京極氏の始祖・氏信は、弘安7年(1284年)に出家して道善と号し、弘安9年(1286年)に、自身の没後追善のために清瀧寺へ料田を寄進した(「佐々木氏信寄進状」徳源院蔵)。『寛政重修諸家譜』では、清瀧寺の創建を弘安9年(1286年)としている。これ以降、京極家の菩提寺となった。その後、高氏が母方の祖父・宗綱の供養のために西念寺を建立し、「清瀧西念両寺々務条々」を制定したほか、高詮の菩提寺である能仁寺の整備、高光の菩提寺である勝願寺など、清瀧寺周辺の整備が進んだ。

(3) 高次から高豊に至る復興

清瀧寺の整備は、中興の祖とも称される高次から高豊に至るまで段階的に実施され、寺院や寺域が改められていった。高次が発給した「清瀧惣坊中宛」の書状(「京極高次書状」徳源院蔵)に、「正祖屋敷」の「台所」を建てるために、「少し地形せばく」、「北の方」を増築したいとする内容がある^{※1}。忠高は、高次の墓所を清瀧寺に営んだほか、清瀧寺参道の整備や参道に面して建物を建てたと発掘調査で判明した^{※2}。高和は、丸亀へ転封となったが、「清瀧寺諸宇観を改む」ような整備をした(「佐々木氏信寄進状」奥書)。高豊は、寛文12年(1672年)に自藩領であった播磨の二村を幕府に返上し、清滝村と大野木村の一部を清瀧寺の所領とした。また、三重塔、位牌堂、客殿を建てて庭園を整備し、周辺にあった歴代当主の墓を集約して墓所とし、十二坊を再興するなどの整備をなした。この整備した寺院を父・高和の法号から「徳源院」と称した。高矩の代に描かれたとされる「清瀧村及び清瀧寺境内図」には、徳源院の庫裡や本堂の北西に「本堂」が描かれている。この本堂が、清瀧寺の本堂と考えられ、高豊が整備した徳源院は、位牌堂や墓所域を整備した清瀧寺境内にある院であった^{※3}。

高豊による墓所域の整備により、墓所の上段に氏信から高吉に至る中世の歴代当主の墓が、下

※1 目付はないものの、発給が「天津少将高次」であるため、高次が大津城主であり、かつ左近衛少将に任ぜられた文禄4～慶長元年(1595～1596年)と考えられる。

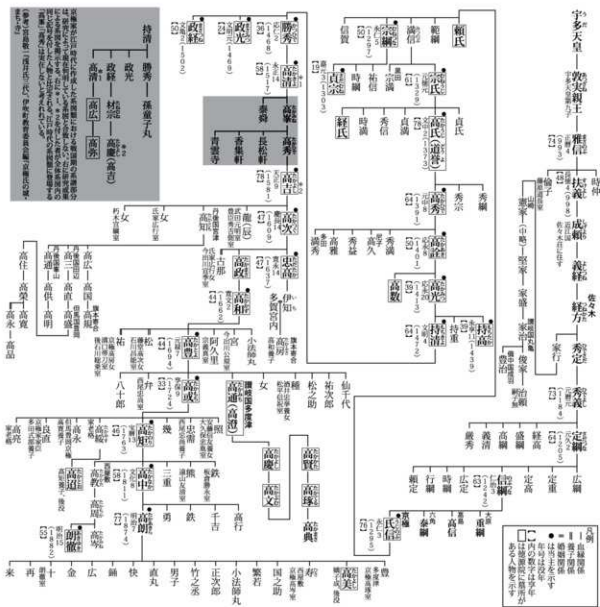
※2 滋賀県教育委員会事務局文化財保護課編「清瀧寺遺跡・能仁寺遺跡」滋賀県教育委員会事務局文化財保護課、2012年による。

※3 中川治美「京極家菩提寺「清瀧寺」の実像を追う」『淡海文化財論叢』第4輯、淡海文化財論叢刊行会、2012年による。

段に高次から高中に至る近世の歴代藩主の墓、分家である多度津藩主5代の墓が営まれ、今日まで継承される景観の原形が整えられた。

(4) 近代以降

丸亀藩主で徳源院に墓が営まれたのは高中が最後であり、隠居後、明治7年(1874年)に丸亀で死去した高朗は、丸亀の玄妻寺に墓所を営んだ。また、藩主在任中に明治維新を迎えた朗徹は東京に移住し、朗徹を含めた以降の当主は東京の光林寺に墓所を営んだ。徳源院は、近世を下ると日光輪王寺末となっていたが、明治以後は延暦寺の末寺として今日に至っている。



〔図2-15〕 近江源氏佐々木氏・京極氏系図

(香川県立ミュージアム編『丸亀京極家一名門大名の江戸時代』香川県立ミュージアム、平成24年(2012年)を基に作成した)

主要参考文献

- 平凡社地方資料センター編『清滝村』『徳源院』『岷賀山の地名』日本歴史地名系25、平凡社、1991年
- 山崎町史編さん委員会編『山崎町史』本編、山崎町、1991年
- 丸亀市史編さん委員会編『新編丸亀市史』2近世編、丸亀市、1994年
- 中川治美『清滝寺徳源院』にまつわる三つの絵図『淡海文化財論叢』第3輯、淡海文化財論叢刊行会、2011年
- 香川県立ミュージアム編『丸亀京極家一名門大名の江戸時代』香川県立ミュージアム、2012年
- 中川治美『京極家菩提寺「清滝寺」の実像を追う』『淡海文化財論叢』第4輯、淡海文化財論叢刊行会、2012年

第2項 史料と既往研究

(1) 文献史料

文献史料は『清瀧寺徳源院文書』・『諸事雑記』・『清瀧雑記』などがある。『諸事雑記』は宝暦4～文化2年(1754～1805年)の51年間の清瀧村の記録で、堀井氏の祖先である当時庄屋の吉田藤左衛門による。『改訂 近江國坂田郡志』によれば『清瀧雑記』は、文政年間(1818～1830年)に、当時の京極氏の代官小谷氏が種々の事項を記録したものとされる。

(2) 系図

徳源院所蔵の『佐々木京極氏系図』『佐々木六角氏系図』のほか讃岐丸亀藩伝来の系図、『群書類従』『寛永諸家系図伝』『寛政重修諸家譜』など複数が知られ、当主を誰とするか、何代目とするか、統柄や系譜などで異なる記述が見られる。

(3) 絵図

清瀧寺京極家墓所とその周辺を描いた主な絵図は、下記が挙げられる。

①「清瀧村古図」

清瀧区所蔵の水彩画「清瀧村古図」は、図中に「元禄十三年辰十一月十一日」と記載がある^{※1}。墓所は上下2段に区画され、上段に五輪塔5基と下段に宝篋印塔と思われる石塔2基と木廟が描かれている。徳源院境内は檜皮葺または柿葺と思われる建物4棟、門2棟と、三重塔がある。徳源院の北西に当たる位置に建物が描かれ、「本堂」と記されているため、清瀧寺本堂と考えられる。十二坊は全てに建物があるのではなく、南側の「万徳坊」「妙法坊」、北側の「理教坊」「勤学坊」「本住坊」の5坊のみである。



【図2-16】「清瀧村古図」元禄13年(1700年)
(清瀧区蔵)部分拡大



【図2-17】「清瀧村古図」元禄13年(1700年)(清瀧区蔵)

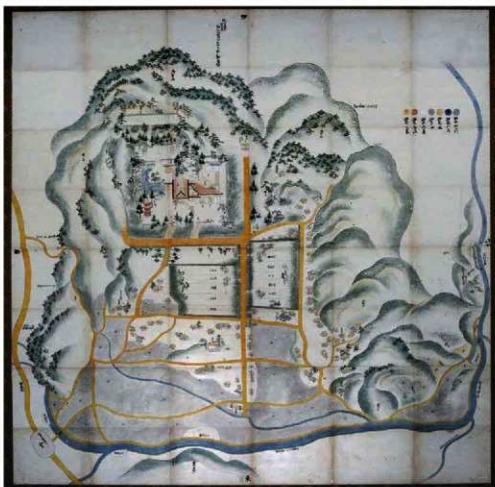
※1 中川治美「『清瀧寺徳源院』にまつわる三つの絵図」『淡海文化財論叢 第三輯』淡海文化財論叢刊行会、平成23年(2011年)では、「清瀧村及び清瀧寺境内図」の模写の可能性も指摘されている。

②「清瀧村及び清瀧寺境内図」

徳源院所蔵の水彩画「清瀧村及び清瀧寺境内図」は、墓所上段には既に現状と同数の宝篋印塔が並んでいる。高次の石廟は基礎部以外の建物は前面扉部に至るまで全面青緑色で彩色されており、笏谷石と思われる緑色凝灰岩を描いたものと推察される。一方、墓所下段においては、高矩・高中ほか多度津藩主高通・高慶・高文・高賢・高琢のものがない。23代高成までの墓石が描かれていることや、図中に「松平甲斐守様御下柏原」と記されていることから、24代高矩が当主で、柏原宿が幕領から大和郡山郡（柳沢家）領となった享保9年（1724年）から宝暦13年（1763年）頃に描かれたと考えられる⁸¹。

墓所が位置する徳源院境内の伽藍配置は、表門の正面に客殿、その北に庫裡、南に三重塔がある。客殿の南西には御仏殿があり、その西側山すそに墓所が位置する。三重塔と墓所の間に池泉庭園があり、客殿の南庭としていた。桜と思われる樹木は三重塔と庭園の間に描かれている。境内は塙に囲まれ、東の門は南から表門と台所門の2つが並ぶ。表門には東山道から山すそに沿ってS字に蛇行する参道が続いている。大門から十二坊の中央を通る「徳源院参道」は、東塙で南に雁行して台所門へ至り、東塙部で北にそって清瀧寺本堂へつながる。清瀧寺本堂は藁葺きとして描かれている。

また十二坊は、本住坊・萬徳坊・理教坊・勸學坊・神藏坊・西藏坊・梅本坊・醍醐坊・金藏坊・成就坊・中之坊・妙法坊が記載されている。絵図では徳源院の境内を囲む東側塙の東側に道があり、その西奥、塙北西角の更に西奥に藁葺きの堂が描かれ、「本堂」と記載されている。



【図2-18】「清瀧村及び清瀧寺境内図」18世紀頃（享保9～宝暦13年（1724～1763年）頃）（徳源院蔵）

③「清瀧寺徳源院図」

墨絵あるいは線画の絵図である。元は『清瀧雑記』に掲載されたものとされるが、原本の所在は不明で、『滋賀縣史蹟調査報告』第5冊に掲載のものは、肥後氏が描き写したものである。

この絵図では、清瀧寺とその周辺のほぼ同じ範囲が同一の構図で描かれるが、本堂・寺域の扉や門・建物や庭園等境内の様子・十二坊・記される地名・村の様子等に相違がみられ、墓所の様子も異なる。

『滋賀縣史蹟調査報告』第5冊では、「同書（註：『清瀧雑記』）に載せた清瀧寺の図を予（註：肥後和男氏）が写したものであるが、この図は『章蕃考二此圖者俊徳院殿高豊公御代之圖也』と記せるもので當時復興の状を示すものである」としている。なお、中川治美氏は他の「清瀧村及び清瀧寺境内図」および「清瀧村古図」の2つに描かれていない道と橋に着目し、この橋を現在の清滝橋として「清滝橋の開設された大正時代中頃以降から肥後和男によって掲載された昭和8年（1933年）までの間に描かれた絵図」と考察している^{※1}。



【図2-19】「清瀧寺徳源院図」（大正中頃～昭和8年（1933年）頃作成と推定される^{※2}）

（滋賀県『滋賀縣史蹟調査報告』第5冊1974年、滋賀県、昭和3～17年〔1928～1942年〕刊の複製から、一部加筆）

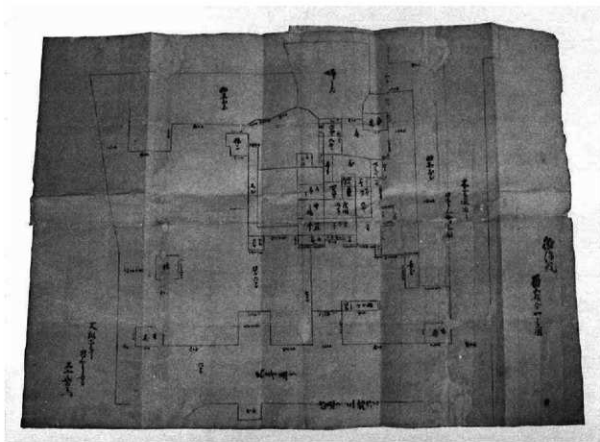
※1 中川治美「『清瀧寺徳源院』絵図が示すもの」『紀要』第34号、2021年による。

※2 本図は、近年の研究（参考文献2、中川、2021年）で大正中頃～昭和8年（1933年）頃作成と推定されているが、「図中に高豊公御代之図也」とあることから、本項では近世の様子を示す絵図として掲載した。

④「徳源院境内古図」（個人蔵）

徳源院の境内が描かれている絵図である。文政2年（1819年）の年号が入っている。墓所や石塔、霊屋は描かれていない。縮尺と寸法が書き込まれ、特に庫裡では間取が細かく書き込まれている。土塀東面に2つの門があることや客殿と庫裡の前面に2つを仕切る線が書き込まれていることなどから、記載内容は「清瀧村及び清瀧寺境内図」に近い。ただ、客殿と庫裡の間や塀に近い建物等には異なる部分もある。また、北東隅と北西隅に描かれている畷は、「清瀧村及び清瀧寺境内図」には描かれていない。

文政2年（1819年）の年号があるため、「清瀧村及び清瀧寺境内図」の50～90年後に描かれた徳源院修理の際の絵図と思われる^{※1}。



【図2-20】「徳源院境内古図」文政2年（1819年）の年号あり（個人蔵）

（滋賀県教育委員会事務局文化財保護課編『徳源院三重塔修理工事報告書』徳源院、昭和53年（1978年）から引用）

※1 滋賀県教育委員会事務局文化財保護課編『清瀧寺遺跡・能仁寺遺跡』滋賀県教育委員会事務局文化財保護課、2012年による。

⑤ 「靈通山清滝寺徳源院境内之図」(滋賀県立図書館蔵)

「靈通山清滝寺徳源院境内之図」は、滋賀県内の著名な神社・寺院の建築や、景勝地・旧跡の風景等、約150か所を銅版画で紹介した明治期の文献資料である。『名蹟図誌近江宝鑑上巻阪田郡』に所収されている。絵図内には、明治29年(1896年)7月の年号の記載がある。墓所には「佐々木京極家家代御廟」とあり、上段に宝篋印塔18基、下段に廟4棟、宝篋印塔22基、石燈籠2基、石碑1基が記載されている。墓所の周囲は、土堀に囲まれている。



【図2-21】「靈通山清滝寺徳源院境内之図」明治29年(1896年)7月、一部加筆
(渡邊市太郎著『名蹟図誌近江宝鑑/上巻/阪田郡』明治30年(1897年)名古屋光影館、滋賀県立図書館蔵)

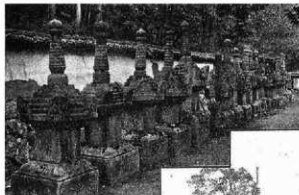
(4) 実測図

墓所全体の实測図は、肥後和男氏によって『滋賀縣史蹟調査報告』第5冊に掲載された「京極氏墓地實測圖」のほか、近年では平成5～7年(1993～1995年)に行われた墓所霊屋修理工事の際の山東町教育委員会によるもの、平成14～18年(2002～2006年)に行われた土堀修理工事の際の工事図面がある^{※23}。

石塔の实測図については『滋賀縣史蹟調査報告』第5冊(1933年刊行)に掲載されている肥後和男氏作成のもの、『近江の石造美術』(1968年刊行)に掲載されている田岡香逸氏(実測は福沢邦夫氏)によるものがある。また、令和2年度(2020年度)に本市で多度津藩の石塔の实測図を作成した。令和元年度(2019年度)には、石廟および石廟内石塔の写真測量を実施した。

(5) 古写真

清滝寺京極家墓所や徳源院を写した古写真のうち、年代が判明している最も古いものは、明治45年(1912年)に発行された書籍に掲載された写真である。昭和11年(1936年)以降の刊行物には、墓所や徳源院付近を撮影した古写真が掲載されている。



【写真2-4】明治45年頃の様子
(日本歴史地理学会『歴史地理』近江号、
明治45年(1912年)から)



【写真2-5】古写真(撮影年代不明)
(『坂田郡柏村清滝寺/佐々木京極氏の墓』章斎文庫81
_8 種アルバ/ム1-81から)



【写真2-6】昭和11年(1936年)頃の様子
(滋賀県史跡名勝天然記念物調査会『滋賀県史跡名勝天然
記念物概観』昭和11年(1936年)から)



【写真2-7】大正7～昭和8年(1918～1933年)
頃の様子(絵葉書写真から)



【写真2-8】古写真
(撮影年代不明)
(『清滝寺京極家墓前談源の所』
章斎文庫76_8 種アルバ/ム2-76から)



【写真2-9】京極高次石廟
(滋賀県坂田郡教育会
『改訂 近江國坂田郡志』第3巻、
昭和18年(1943年)9月)



【写真2-10】「清滝寺正面」
(肥後和男『滋賀県史蹟調査報告』第5冊、滋賀県保勝会、
昭和8年(1933年)から)

(6) 既往研究

史跡の価値付けに関係する既往研究を、以下にまとめる（参考文献の番号は、巻末表-1.2の番号に符合する。）。

①京極家墓所・徳源院

清滝寺京極家墓所と徳源院に関する既往研究には、戦前の論考をはじめ、清瀧寺遺跡・能仁寺遺跡の発掘調査成果に基づく考察（2012・2013年、参考文献27・28）等がある。

徳源院（清瀧寺）の沿革については、肥後（1933年、参考文献1）が史料を挙げてとりまとめた。その後、『改訂 近江國坂田郡志』第3・4・6巻（1942～44年、参考文献2～4）や『山東町史』（1986・1991年、参考文献6・7）が編纂され、新たに確認された文献資料が加えられた。近年では、上垣（2019年、参考文献19）が、清瀧寺京極家墓所の現況の景観がどのような過程で形成されたかを考察しており、墓所の構造や設計企画の検討をふまえ、最終的な景観は幕藩体制が終焉した後に形成されたと推察している。

これらの研究では、史料をふまえ、歴史や変遷が整理されるとともに、墓所の空間性の検討が進められている。

②石塔

清滝寺京極家墓所の石塔群は、宝篋印塔の編年を知る手がかりとして戦前から現在に至るまで調査研究が進められてきた。特に上段にある近世の宝篋印塔を中心に、その石材や意匠についての論考がある。

これまでの調査研究では、銘文や意匠の確認と実測図作成の報告（田岡1968年、参考文献5）や、無銘石塔の製作年代の推定（田中2006年、参考文献10）、中世の宝篋印塔の装飾文の類例化（上垣2008年、参考文献11）、使用石材の目視による鑑定結果の報告（高橋2010年、参考文献12）、使用石材が南北朝期を境に転換されているという指摘があった（田井中2013年、参考文献16）。また、未調査・未実測であった多度津藩の宝篋印塔についても、令和元年（2019年）に調査・実測された（石田2019年、参考文献20）。令和2年（2020年）には、石廟の蛍光X線分析とX線回折分析がされており、降雨や大気汚染による硫酸カルシウム結晶が生じた可能性等が指摘されている（西山2020年、参考文献21）。

③絵図

清滝寺京極家墓所や周辺を描いた絵図に記載されている内容の整理や読み解きが試みられており、絵図から考察される内容などの論考が発表されている。

これら絵図に関する論考では、「徳源院は（中略）清瀧寺を復元整理したものではなく、自らの讃岐丸亀藩に連なる京極家の菩提寺を再建整備したと捉えられる」とする指摘や（中川2011年、参考文献13）、「特に墓所に対する高次・忠高と高和・高豊による二つの整備は（中略）本貫地への思いとともに、京極家における自らの正当性を視覚的に示す」意図があったと推定している（中川2013年、参考文献15）。また、「清瀧寺徳源院図」に描かれている道と橋に着目し、この橋を現在の清滝橋として「清滝橋の開設された大正時代中頃以降から肥後和男によって掲載された昭和8年までの間に描かれた絵図」と考察している（中川2021年、参考文献22）。

第3項 徳源院伽藍の変遷

徳源院伽藍の変遷は、「清瀧村及び清瀧寺境内図」18世紀頃（享保9～宝暦13年〔1724～1763年〕頃）と「清瀧寺徳源院図」（大正中頃～昭和8年〔1933年〕と推定）の2つの絵図から、その一端が読み取れる。

本項では、徳源院の伽藍配置が詳しく描かれた18世紀頃の「清瀧村及び清瀧寺境内図」と「徳源院境内古図」（文政2年〔1819年〕、平成10年度（1998年度）作成の「徳源院遺跡地形図」と現況とを比較した。比較の結果、18世紀頃の高豊による整備時期、「徳源院境内古図」や本堂鬼瓦に記された文政11年（1828年）頃の整備時期、そして現在の3期に分けられると考えられる。

3つの時期を比較すると、京極家墓所の成立後、建造物や庭園の配置等に一部変化が見られるものの、徳源院伽藍の地割構成は継承されていることが分かる。

（1）18世紀頃「清瀧村及び清瀧寺境内図」の伽藍配置

「清瀧村及び清瀧寺境内図」では、三重塔の前に園池があり、墓所の東に御殿、北東に客殿、客殿の南に園池がある、中門廊の構成であったと思われる。建造物の配置構成から、玄関から客殿へ進み、その後墓所に至る経路が推定される。この時御佛殿が客殿南西にあることから、庭庭を経て、墓参していたと思われる（図2-22）。

（2）文政期「徳源院境内古図」の伽藍配置

文政2年（1819年）の年号がある「徳源院境内古図」と18世紀に描かれた「清瀧村及び清瀧寺境内図」とでは、一致する部分がある一方で、客殿と庫裏の間や塀に近い建物等で異なる点が見られる。また、両者を比較すると北東隅と北西隅にある蔵の有無に違いがあり、18世紀以降、「徳源院境内古図」が描かれるまでに新造されていたことが推測される（図2-23）。また、平成の改修の際には鬼瓦から文政戊子（11年）3月（1828年）の年号が確認された（写真2-13）。

（3）現代の伽藍配置

現代に入ると、これまでの絵図では2つ描かれていた門が1つに改められ、中門廊・玄関が無くなった。また、平成14年（2002年）に、本堂と庫裏が同規模で建て替えられた（図2-25）。平成の改修以前に撮影された古写真（写真2-11,12）には、寄棟造の本堂、玄関式台がある庫裏、位牌堂が確認できる。現在の位牌堂は、「徳源院境内古図」にある御佛殿の位置を踏襲しているものと考えられる。



〔写真2-11〕旧本堂



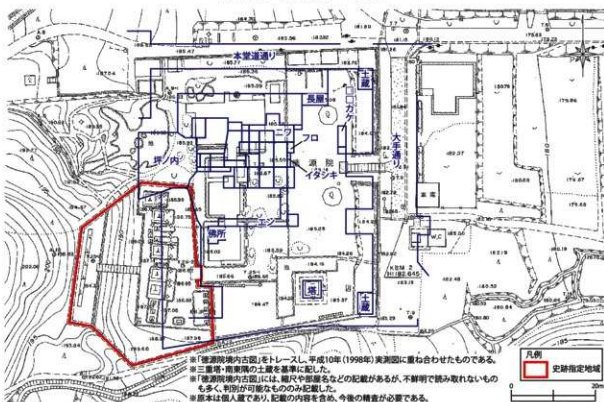
〔写真2-12〕旧庫裏玄関



〔写真2-13〕旧本堂鬼瓦の銘



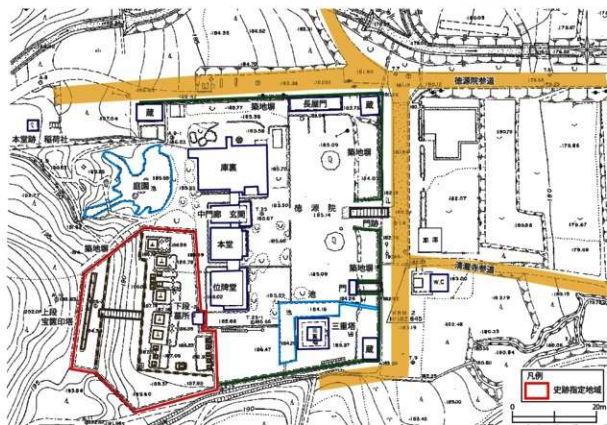
〔図2-22〕「清瀧村及び清瀧寺境内図」18世紀頃（享保9～宝暦13年（1724～1763年）頃）部分拡大（徳源院蔵）一部加筆



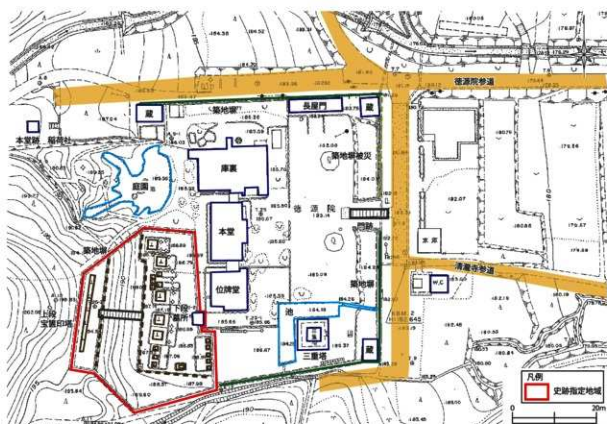
〔図2-23〕「徳源院境内古図」文政2年（1819年）と平成10年（1998年）の比較（1：900）

※「徳源院境内古図」をトレースし、平成10年（1998年）実測図を重ね合わせたものである。
 ※三重塔・南東隅の土蔵を基準に配した。
 ※「徳源院境内古図」には、縮尺や距離などの記載があるが、不鮮明で読み取れないものも多く、判別が可能なもののみ記載した。
 ※図本は個人蔵であり、記載の内容を含め、今後の精査が必要である。

凡例
 史跡指定地域



[図 2-24] 近代～平成 10 年 (1998 年) 頃までの徳源院伽藍配置 (1 : 900)



[図 2-25] 現在の徳源院伽藍配置 (1 : 900)

第4項 墓参に関わる区域

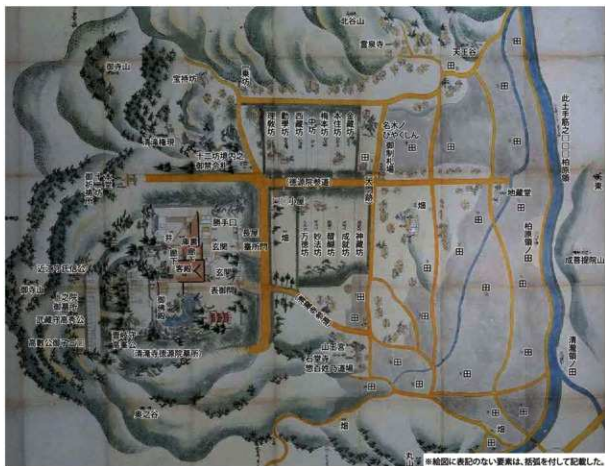
徳源院では、京極家菩提寺として毎年全国から京極家関係者が集い、初代氏信以降現在に至るまで七百年以上続く法要が催されている。

京極家の菩提寺は、古くは徳源院だけでなく、能仁寺遺跡から出土した遺物から複数存在していたことが明らかになっている。十二坊以外の坊等は全容が明らかになっていないが、十二坊や宝持坊などの施設が数多くあったことが分かる。

18世紀頃(享保9年[1724年]以降)に描かれたとされる「清瀧村及び清瀧寺境内図」は、17世紀後半に高豊が再興した時期に近い状況を示し、墓所や村域の様子が詳細に記載されている。十二坊を内包する村域の地割構成や配置、規模は、「清瀧村及び清瀧寺境内図」に描かれた石堂寺や参道、山、地形、河川に加え、能仁寺や宝持院等の発掘調査の成果から範囲を推定した。

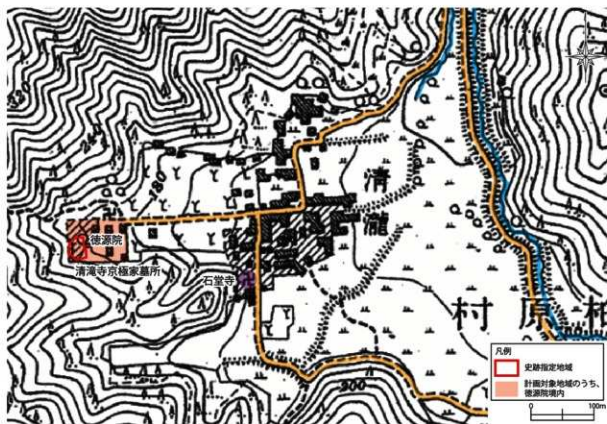
徳源院の基幹的な寺域、参道、河川の位置は、18世紀の「清瀧村及び清瀧寺境内図」と明治26年(1893年)測図、現況図を比較し、図2-27,28(徳源院参道、十二坊東端道路、東部道路、河川、清瀧寺参道)のように推定した。

また、大門跡の伝承地は徳源院参道とされるが、18世紀の「清瀧村及び清瀧寺境内図」には描かれていない。「諸事雑記」には京極高矩の遺体を大門まで迎えに出た記述があり、清瀧区の話では、近代まで大門を通る道は村人が自由に通行できる性格のものではなかったことが分かる^{※1}。

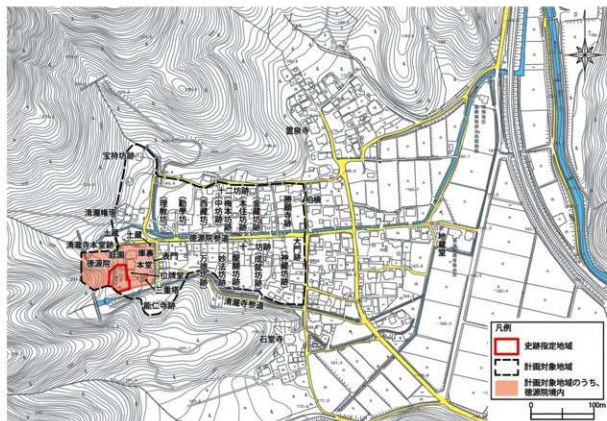


〔図2-26〕「清瀧村及び清瀧寺境内図」18世紀頃(享保9～宝暦13年[1724～1763年]頃)部分拡大(徳源院蔵)一部加筆

※1 滋賀県教育委員会事務局文化財保護課編『清瀧寺遺跡・能仁寺遺跡』滋賀県教育委員会事務局文化財保護課、2012年による。



〔図2-27〕明治26年(1893年)測図(1:6,000)
 (『今昔マップ』<https://ktgis.net/kjmapw/>「春照」2万分の1地形図から、一部加筆)



〔図2-28〕現況図(S=1:6,000)

〔表2-8〕「清瀧村及び清瀧寺境内図」と現状の比較

地区	「清瀧村及び清瀧寺境内図」 (享保9～宝暦13年〔1724～1763年〕頃)	現状
墓所上段	宝篋印塔 18基	宝篋印塔 18基
		石積
	塀(北・西・南側)	土塀(北・西・南側、下段と連続)
	階段(下段～上段へ至る)	階段(下段～上段へ至る)
墓所下段	石廟1基	石廟1基
	木廟2基	木廟4基
		宝篋印塔(廟内) 5基
	宝篋印塔(廟外) 3基	宝篋印塔(廟外) 11基
	五輪塔3基	五輪塔3基
	石燈籠12基	石燈籠16基
	石積(西・南側)	石積(西・南側)
	垣根(北・東側)	
	冠木門	棟門、潜り門
	表御門	門(庫裏東側)
徳源院境内	台所門	
		長屋門(庫裡北東側)
	客殿(檜皮または柿葺、唐破風玄関、 中門廊、入母屋妻入)	本堂
	庫裏(檜皮または柿葺き、式台玄関、客殿 と廊下で接続、客殿間塀、潜り門)	庫裏、廊下
	御佛殿	同位置に位牌堂が建てられている。
	長屋	
	蔵1棟 (庫裡北西側)	蔵3棟 (庫裡北西側、長屋門東側、三重塔南東側)
	井(庫裡西側)	井戸(庫裡北側)
	塀・石積(北・南・東側)	築地塀(北・東・南側)
	三重塔	三重塔
	松、針葉樹、花木、常緑樹、竹林	堀(北・西側) 松、桜、植、梅、モミジ、萩、枝垂桜、 道誉桜
	池・石組・築山(客殿南側)	
	石組・飛石(客殿西側)	池・石組・築山(庫裏西側)
清瀧寺本堂跡	茅葺三間、寄棟、宝珠、正面中央に板戸 「十二坊御祈禱所」と記載あり	稲荷社祠、石積基壇
徳源院参道	道が描かれている。	徳源院参道
清瀧寺参道	道が描かれている。	清瀧寺参道
十二坊跡	北側：理教坊・勸学坊・西藏坊・中坊・梅本坊・ 本住坊・金蔵坊 南側：万徳坊・妙法坊・醍醐坊・成就坊・ 神蔵坊 石積、十二坊境内之御禁札	民家・田畑、土塁、地割
地藏堂	地藏堂(徳源院参道東部)	地藏堂
石堂寺	石堂寺・山王社 (清瀧寺参道南東部、入母屋檜皮または柿葺)	石堂寺
宝持坊跡	宝持坊(入母屋)、門	坊跡
清瀧権現	清瀧権現 石階段	清瀧権現本殿、拜殿 石積、石階段
御寺山	御寺山	
霊泉寺	霊泉寺	霊泉寺

第5項 史跡指定地域内の修理履歴

史跡指定地域内に位置する構造物等の修理について、報告書等により確認できる近年の修理内容を以下にまとめる。

(1) 土塀

史跡指定地域の土塀は損傷が著しく昭和47～48年度(1972～1973年度)に国庫補助事業で修理を行った。修理では、屋根瓦の葺き替えや傾斜部の基礎の石積中心部をコンクリート造にし、外側に石積を設置した。平成7年度(1995年度)には土塀の壁の上塗りや中塗り、屋根の破損箇所の内最少限度の応急的な修理を行った。その後、土塀は長年にわたる風雪と近年の台風等自然の猛威により土塀および門などに損傷を受け、躯体そのものも耐用年限に達していたため、国宝重要文化財等保存整備費補助金により、平成14～18年度(2002～2006年度)までの5か年間にわたって、全面改修を行った^{*1}。

(2) 木造霊屋

下段の第22・23・24・25代の4棟とも昭和50年(1975年)の町史跡指定後に町単独の補助事業として軒廻り材や雑作材等を取替えた部分修理に屋根全面葺き替えを行った。その後、この4棟の木造霊屋が平成4年(1992年)3月31日に県指定史跡となり、平成5年度(1993年度)に第24代高矩・25代高申を、平成6年度(1994年度)に第23代高或を、平成7年(1995年)に第22代高豊の木造霊屋を県費補助事業で解体修理を行った^{*2}。平成5年(1993年)の修理の際、露盤瓦の裏書きにより、高矩の霊屋が明和2年(1765年)に、高申の霊屋もほぼ同年代に建設されたことが明らかとなった。高豊と高或のものも、その形状からこれらと同年代頃のものと考えられた。

(3) 石積

上段の石積みについては自然災害により平成7年度(1995年度)に修理を実施した。



[写真 2-14] 石廟屋根応急処置前



[写真 2-15] 石廟屋根板石調整後

(4) 石廟

京極高次の石廟は、経年劣化により石材の緩みやずれなどが進行したため、令和元年度(2019年度)に「史跡清滝寺京極家墓所保存修理事業(調査・測量、屋根矯正、木製軸組補強、鋼鉄足場設置などの応急修理)」を行った。



[写真 2-16] 石廟内部応急処置前



[写真 2-17] 石廟内部応急処置後

*1 株式会社 環境空間設計編集『史跡清滝寺京極家墓所土塀修理工事報告書』徳源院、2006年による。

*2 清滝寺徳源院京極家墓所木造霊屋解体修理実行委員会「滋賀県指定史跡清滝寺徳源院京極家墓所木造霊屋(第22・23・24・25代)保存修理工事報告書」清滝寺徳源院、1996年による。

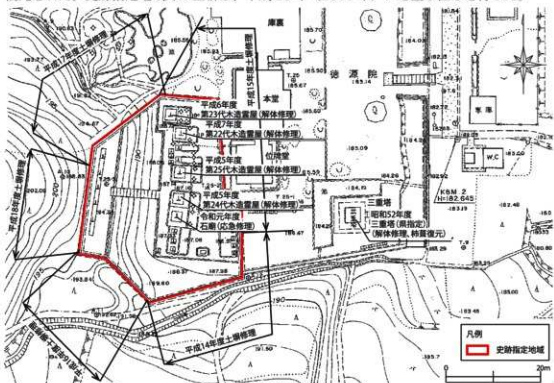
*3 滋賀県「滋賀県指定有形文化財 徳源院三重塔修理工事報告書」徳源院、1978年による。

(5) 環境整備

土塀修理工事に伴う環境整備工事に伴い、樹木の伐採を平成14・16・18年度(2002・2004・2006年度)、場内堆積土鋤取(厚100mm程度)および階段石積み補修を平成17年度(2005年度)、西側土塀外部既設U字側溝の堆積土除去・清掃を平成18年度(2006年度)に行った^{*1}。

(6) 指定地外

指定地外では、徳源院三重塔は昭和48年(1973年)に滋賀県指定を受けてから4年後の昭和52年(1977年)に柿葺きに復元した解体修理を実施した^{*3}。三重塔は、丸亀から移築したという伝承があったが、現在の場所に創建されたものであり、軒回り以外は手を加えず、建立後初めての解体修理であることが確認された。また、修理前には瓦葺であったが、創建期の柿葺に復元された。史跡指定地域外の土塀は、平成23年(2011年)にも塗り直しを行った。



〔図2-29〕 史跡指定地域内外の修理実施位置図(1:700)

〔表2-9〕 史跡指定地域内外の修理履歴
(出典は巻末表-2に符合する)

	修理対象	実施年・年度	修理内容	出典
史跡指定地域内	土塀	昭和47～48年度(1972～1973年度)	土塀修理	26
		平成7年度(1995年度)	土塀修理	
		平成14～18年度(2002～2006年度)	土塀修理	
	木造霊屋	昭和40年(1965年)頃	木造霊屋修理	25
	平成5～7年度(1993～1995年度)	木造霊屋修理		
	石積	平成7年度(1995年度)	上段石積修理	26
石廟	令和元年度(2019年度)	石廟応急修理		
植栽	平成14・16・18年度 (2002・2004・2006年度)	植栽整備(高木伐採)		
史跡指定地域外	堆積土除去	平成17・18年度(2005・2006年度)	堆積土除去、階段石積補修	23
三重塔(県指定)	昭和52年度(1977年度)	解体修理、柿葺き復元		

第6項 史跡指定後の発掘調査

史跡指定地域内および徳源院境内では、これまで発掘調査は実施されていないものの、史跡指定地域の周辺において関連遺跡の発掘調査が実施されている。

(1) 宝持坊遺跡発掘調査

徳源院境内の北東に位置する宝持坊遺跡では、砂防堤および工事用道路建設に伴う調査が昭和59年度(1984年度)に実施された。宝持院跡平坦地北の峡谷沿いに庭園・土塁・五輪塔・石塔群を一部伴う21の郭状遺構が階段状に確認され、少なくとも近世時には宝持坊のほかに行くつかの坊が機能していたものと考えられる。

(2) 宝持坊遺跡発掘調査

昭和61年度(1987年度)には、塔中川荒廃砂防工事に伴う発掘調査が実施された。調査地は、昭和59年度調査地の砂防堤下流中川に続く水路部分に当たり、郭状遺構の端部で宝持院北東隅にかかる。トレンチ1では、宝持院境内北東辺を画していた石垣の基底部と考えられる石列を検出した。石列を覆う表土中(厚さ約30cm)から、磁器21、陶器24、土師器3、硝子瓶2石、白1、瓦13、金具1、釘2が出土した。細片ながら多種の遺物で、磁器では14世紀代の中国製輸入品と判定できる皿片を出土した。トレンチ4-d区では柱根を遺存する柱穴SP001～003の3基を検出した。柱穴は、「清瀧村古図」にある「護摩屋敷」の掘立建物に相当するものと推定されたが、遺構の年代が確定できなかったため可能性を指摘するにとどまった。

(3) 能仁寺遺跡発掘調査

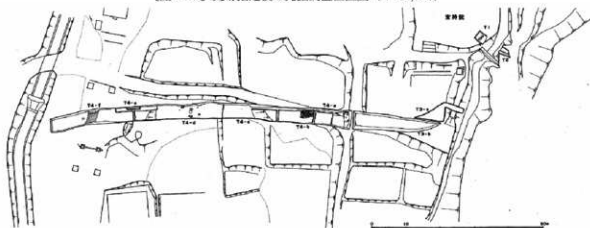
史跡指定地域の南に位置する能仁寺遺跡は、能仁寺川の通常砂防工事に伴い、平成20・21年度(2008・2009年度)に発掘調査が実施された。対象地は、能仁寺谷と呼ばれ、能仁寺跡と伝承があった。寺伝によると、京極家第七代高詮の戒名が「能仁寺殿乾嶺淨高大居士」であることから、高詮の菩提寺とみられている。谷の上方の調査では、長方形の基壇の中世墓が2基検出された。そのうち1つには5基の五輪塔の基礎が据えられ、周辺に上の部材が散乱している状況が確認された。基礎の右側に「貞治三年(1363年)、左側に「七月□日」銘のある宝篋印塔が出土していることから、南北朝時代から墓地として使用されていることが推定された。調査地の東方では、寺院の中心部である方形基壇(南北約12.5m×東西約14m)が検出され、基壇東辺で山門の遺構、そこから東へ伸びる参道(幅約3m×延長17m)と石垣(長さ14m×高さ1.5m)が検出された。方位をそろえた基壇・山門・参道や背後の墓地、出土遺物に日常雑器が少なく、精良な土器が目立つことなどから、中世寺院跡と考えられ、土器の年代観から応永8年(1401年)に没した高詮の菩提寺と推定された。

※参考文献

- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会編集・発行『宝持坊遺跡発掘調査報告書—坂田郡山東町清滝—』1987年3月
 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会編集・発行『清滝寺遺跡・能仁寺遺跡 能仁寺川通常砂防工事に伴う発掘調査報告書』2012年
 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会編集・発行『清滝寺遺跡・能仁寺遺跡Ⅱ 能仁寺川通常砂防工事に伴う発掘調査報告書2』2014年



【図 2-30】 史跡指定後の発掘調査位置図（1：6,000）



【図 2-31】 昭和 61 年度発掘調査 トレンチ配置図（1：1,000）

（滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会編集・発行『宝持坊遺跡発掘調査報告書—坂田郡山東町清滝—』1987年）

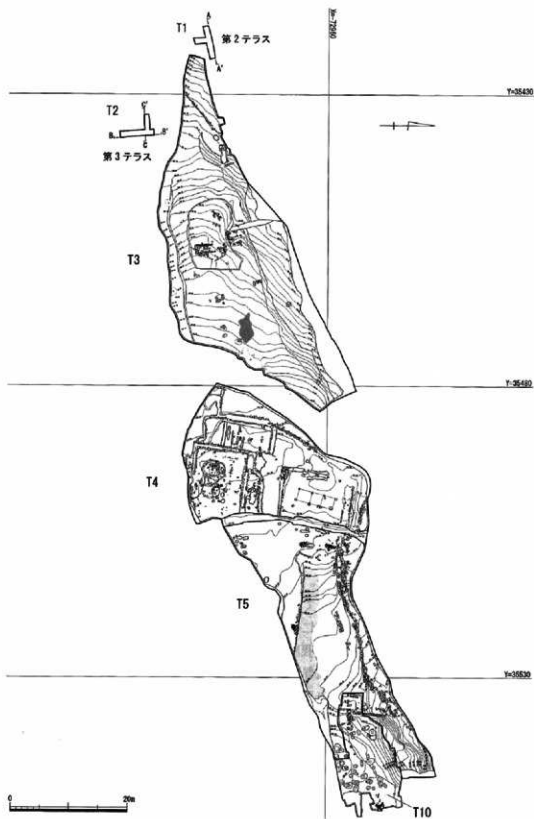


【写真 2-18】 T 1 石垣検出状況

（滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会編集・発行『宝持坊遺跡発掘調査報告書—坂田郡山東町清滝—』1987年）



【写真 2-19】 検出された寺院跡 1 区（東から参道・基壇・方形区画をのぞむ／右は清滝寺徳源院南土塙）
（滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会編集・発行『清滝寺遺跡・能仁寺遺跡Ⅱ 能仁寺川通常砂防工事に伴う発掘調査報告書 2』2014年）



〔図2-32〕 能仁寺遺跡1区トレンチ配置図（1：650）

〔滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会編集・発行「清滝寺遺跡・能仁寺遺跡 能仁寺川通常砂防工事に伴う発掘調査報告書」2012年〕

第3章 史跡の本質的価値

第1節 史跡の本質的価値

史跡清滝寺京極家墓所は、昭和7年（1932年）に上段の18基と下段の高次塔の計19基が指定された。その際の指定説明文には「鎌倉時代以後慶長年代に至るまでの宝篋印塔の変遷を徴するに足る」「又高次の墓は構造精巧を極めたる石籠の中にありこの種のもの越中高岡瑞龍寺なる前田利長の墓及高野山興院なる結城秀康及其母の墓の石室に類例を見るのみとす」とあり、宝篋印塔の変遷や石廟の精巧さ、希少性等の観点から価値が記されている。昭和7年（1932年）の指定時には、守護大名京極家の歩みを示す石塔の資料としての価値がより強く意識され、指定に至ったと考えられる。その後、平成14年（2002年）には、幕末まで続く京極家の墓所として近世の大名家の墓所部分も含めて一体として保存を図るため追加指定に至った。追加指定によって付加された価値を踏まえ、本質的価値を整理する。

1 鎌倉時代から幕末まで続く京極家の歩みを示す歴代墓所であり、今日まで墓参が継続されている。

京極家は、初代氏信以降現代に至るまでの七百年にわたって存続している氏族であり、清瀧寺は菩提寺として京極氏の拠り所とされてきた。清瀧寺京極家墓所は、京極家歴代の墓所として、中世から近世に至る京極家の歩みを示している。

墓所は、徳源院が18世紀以降の姿を現在まで保存継承してきた。墓所では現在に至るまで墓参の法要等が毎年続けられ、清瀧寺徳源院境内の参道や本堂、位牌堂、三重塔等の墓参を支える寺院空間とともに、墓参形態が現在まで継承されている。

2 墓所の選定と配置から、京極家の始祖伝来の本貫地に対する尊崇の念や氏族内の関係性が分かる。

京極家の墓所は、始祖伝来の本貫地であった北近江（清瀧）に集められ、その同じ場所に近世大名としての墓所を営んだ。近世大名京極家は、中世以来の守護の系譜を顕示するとともに、京極家の始祖氏信の菩提寺である清瀧寺に墓所を営む埋葬地の選定から、中世以来京極家一族の本貫地である北近江（清瀧）に対し強い尊崇の念を持ってきたことが分かる。

また、清滝寺京極家墓所は上段と下段に分かれ、上段は京極氏の始祖氏信以降中世の京極家歴代の墓所とし、下段には京極家中興の祖となる高次以降の近世大名としての京極家歴代の墓を配している。霊屋や宝篋印塔の配置から、京極家一族内の系譜や関係性を知ることができる。

3 墓石や霊屋の意匠や形態から、石造物の時代変遷や特徴、京極家の系譜をたどることができる。

清滝寺京極家墓所には、鎌倉時代から江戸時代までの宝篋印塔34基と五輪塔3基が配置され、石造物として時代経過における意匠の変化や各時代の特徴が表れている。近世大名として最初に葬られた高次の墓は、精巧に造られた笏谷石製霊屋の中に宝篋印塔が収められている。歴代藩主の墓のうち高豊、高成、高矩、高中の墓には木製の霊屋が設けられ、高次の墓と異なる意匠として造られている。霊屋や宝篋印塔の時代変遷とともに、様式や形態の違いから、歴代藩主の功績や京極家一族内の系譜をたどることができる。

4 近世大名により復興された墓所と墓所を護持する伽藍や村域の地割構成が保存されている。

清滝寺京極家墓所は、中世以降幕末に至る京極家歴代の墓所として営まれてきた。京極家は、近世歴代藩主の功績によって存続し、その菩提追善に努められ、現在見る墓所およびその菩提寺である徳源院、十二坊が整えられ護持されてきた。墓所および清瀧寺徳源院の寺域、十二坊を構成する村域の配置や地割は、18世紀以降に描かれた絵図に見る姿を現在までよく残している。墓所とその周辺には、関連する建造物や十二坊の地割構成、遺跡、風致景観が保存されている。

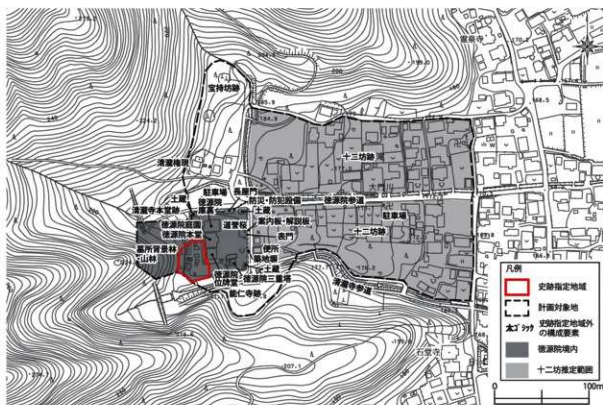
第2節 構成要素の特定

前記した本史跡の本質的価値に関する考え方にに基づき、史跡を構成する要素を整理する。

史跡指定地域内の構成要素は、本質的価値を構成する要素、史跡の風致景観を構成する要素、史跡の管理・活用に必要要素に分類し、史跡指定地域外において史跡の本質的価値を補完する要素についても整理した。

[表3-1] 史跡を構成する要素

指定区分	分類	主な要素	
史跡指定地域内	本質的価値を構成する要素	墓石・霊屋	宝篋印塔、五輪塔、石燈籠、讚骸塚、霊屋（石廟、木廟）、石敷、縁石
		構造物	門、墓域を囲む土塀、土塀裾石垣、階段、石積
		地割	土塀に囲まれた墓域と上下2段に形成された地形
	史跡の風致景観を構成する要素	植栽	下段部植栽（低木）、斜面部植栽（高木・地被類）
	史跡の管理に必要な要素	排水路	
	史跡の活用に必要要素	案内板、解説板	
史跡指定地域外	史跡の本質的価値を補完する要素	史跡の歴史的経緯を示す要素	徳源院境内（徳源院本堂・徳源院位牌堂・徳源院三重塔・徳源院車裏・土蔵・長屋門・築地塀・道管板・徳源院庭園）、清瀧寺本堂跡、墓所背景林・山林、参道（清瀧寺参道・徳源院参道）、十二坊跡、能仁寺跡、宝持坊跡、清瀧権現
		史跡の管理に必要な要素	防災・防犯設備
		史跡の活用に必要要素	案内板、解説板、便所、駐車場

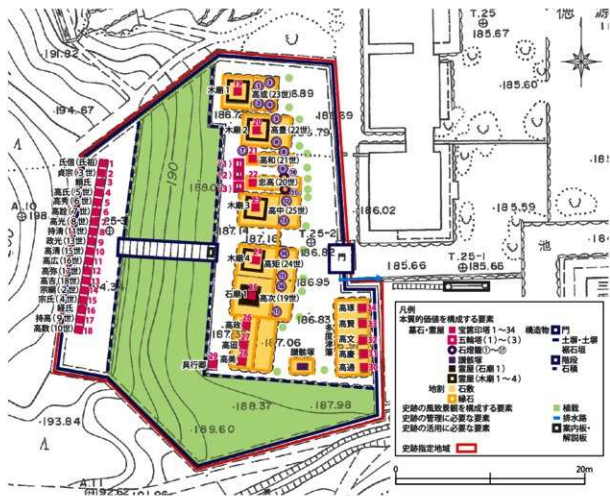


[図3-1] 構成要素位置図（1：4,000）

第1項 史跡指定地域内

(1) 本質的価値を構成する要素

墓所は上下2段に分かれ、上段には氏信以降高吉までの歴代当主の宝篋印塔18基が、下段には高次から高中までと、分家である多度津藩主、更に北畠具行の石塔など15基が並ぶ。こうち高豊・高成・高矩・高中のものは木造廟に、高次のものは笏谷石裂の石廟に取められている。墓所に埋葬されたのは文化8年(1811年)の高中が最後で、高朗は丸亀の玄要寺に埋葬されるが、それとは別に「讃骸塚」と呼ばれている遺髪塚がある。明治を迎えた27代(丸亀藩7代)朗徹は東京麻布の光林寺に埋葬されている。



[図3-2] 構成要素位置図 (1:400)



[写真3-1] 上段墓石



[写真3-2] 下段墓石



[写真3-3] 宝篋印塔1



[写真3-4] 宝篋印塔2



[写真3-5] 宝篋印塔3



[写真3-6] 宝篋印塔4



[写真3-7] 宝篋印塔5



[写真3-8] 宝篋印塔6



[写真3-9] 宝篋印塔7



[写真3-10] 宝篋印塔8



[写真3-11] 宝篋印塔9



[写真3-12] 宝篋印塔10



[写真3-13] 宝篋印塔11



[写真3-14] 宝篋印塔12



[写真3-15] 宝篋印塔13



[写真3-16] 宝篋印塔14



[写真3-17] 宝篋印塔15



[写真3-18] 宝篋印塔16



[写真3-19] 宝篋印塔17



[写真3-20] 宝篋印塔18



[写真 3-21] 宝篋印塔 19・木廟 1・石燈籠 1～4



[写真 3-22] 宝篋印塔 20・木廟 2・石燈籠 5～6



[写真 3-23] 宝篋印塔 21・石燈籠 8～9



[写真 3-24] 宝篋印塔 22・石燈籠 10～11



[写真 3-25] 石燈籠 7



[写真 3-26] 五輪塔 1



[写真 3-27] 五輪塔 2



[写真 3-28] 五輪塔 3



[写真 3-29] 宝篋印塔 23・木廟 3・石燈籠 12～13



[写真 3-30] 宝篋印塔 24・木廟 4・石燈籠 14～15



【写真3-31】石廟・宝篋印塔25・石燈籠16～17
(令和元年〔2019年〕9月)



【写真3-32】宝篋印塔26～28 (右から)



【写真3-33】宝篋印塔26



【写真3-34】宝篋印塔27



【写真3-35】宝篋印塔28



【写真3-36】宝篋印塔29



【写真3-37】宝篋印塔30



【写真3-38】宝篋印塔31



【写真3-39】宝篋印塔32



【写真3-40】宝篋印塔33



【写真3-41】宝篋印塔34



【写真3-42】多度津藩墓石全景



【写真3-43】讚岐塚

〔表3-2〕宝篋印塔の構造形式 - 1

(位置番号は図3-2に対応する。西村清雄『佐々木元極氏と近江清瀧寺』近江文庫54、サンライズ出版、2015年参照)

位置 (北から)	世代・俗名	塔石質	塔高 (cm)	笠石の隅飾突起			水輪 紋様	台石(地輪) 文字紋様			記事	
				形	紋様	高さ (cm)		外側への 開き (角度)	両側に	正面		年代
1 上段	始祖氏信	花崗岩	254	三弧	梵字	32	0cm (0.0)	梵字	永仁三年乙未 八月十三日	蓮華	永仁3年 (1295年)	
2 上段	3世貞宗	"	255	"	"	29	0.5cm (2.5)	"	嘉元二年 八月十八日	"	嘉元2年 (1304年)	
3 上段	世継外頼氏	"	231	"	"	29	3.0cm (10.5)	"	無	"		
4 上段	5世高氏	砂岩	261	二弧	"	22	3.0cm (10.5)	"	応安六癸丑 十一月六日	"	文中2年 (1373年)	
5 上段	6世高秀	"	231	"	"	22	3.2cm (10.5)	"	明德二年辛未 十月十一日 仙林寺殿	"	元中8年 (1391年)	
6 上段	7世高詮	"	216	"	"	20	4.0cm (15.0)	"	無	"	応永8年 (1401年)	
7 上段	8世高光	花崗岩	234	"	無	19	3.0cm (13.0)	"	応永二十年 八月十九日	"	応永20年 (1413年)	蓋、 相輪後補
8 上段	11世持清	"	216	"	"	19	4.0cm (13.0)	"	文明四年 八月四日	"	文明4年 (1472年)	"
9 上段	14世政光	"	225	三弧	梵字	29	2.0cm (7.0)	"	無	"		
10 上段	15世高清	"	222	"	"	28	1.0cm (5.0)	無	無	"		
11 上段	16世高広	"	240	弧	無	25	1.0cm (5.0)	梵字	無	"		
12 上段	17世高弥	"	194	三弧	日輪	23	1.5cm (5.0)	無	無	"		相輪後補
13 上段	18世高吉	砂岩	111	二弧	無	12	1.0cm (3.0)	梵字	禪林寺殿 心寂道安 天正九年 正月二十五日	"	天正9年 (1581年)	
14 上段	2世宗綱	花崗岩	255	三弧	梵字	33	2.0cm (5.0)	"	永仁五年 十月二十九日	"	永仁5年 (1297年)	
15 上段	4世宗氏	"	234	"	"	29	2.0cm (5.0)	"	元徳元年 十月二十七日	"	元徳元年 (1329年)	相輪後補
16 上段	世継外経氏	"	219	"	日輪	25	1.5cm (5.0)	"	比丘 延文五年戊戌 正月二十五日	"	正平14年 (1360年)	
17 上段	9世持高	砂岩	222	二弧	"	20	2.0cm (5.0)	"	永享十一年 正月十四日	"	永享11年 (1439年)	相輪後補
18 上段	10世高数	"	207	三弧	"	24	1.5cm (3.0)	"	嘉吉元年 六月二十四日	"	嘉吉元年 (1441年)	"
25 下段	19世高次	"	166	二弧	無	16	6.0cm (25.0)	"	慶長十四巳辰年 五月三日	法号	慶長14年 (1609年)	

〔表3-3〕霊屋の構造形式
(出典は巻末表-1、2に符合する)

霊屋	桁行 (mm)	梁間 (mm)	総高 (mm)	建築時期	構造形式	出典	
木廟1	高矩(24世)	1,788	1,788	4,170	木廟2と同年代	一重、宝形造、向拝一間、本瓦葺	25
木廟2	高中(25世)	1,818	1,818	4,050	明和2年(1765年) (顕聖瓦の厚書きによる)	一重、宝形造、向拝一間、本瓦葺	25
木廟3	高或(23世)	1,806	1,806	4,020	明和頃	一重、宝形造、向拝一間、本瓦葺	25
木廟4	高豊(22世)	1,806	1,806	4,070	明和頃	一重、宝形造、向拝一間、本瓦葺	25
石廟	高次(19世)	2,448	2,045	3,030	寛文11年 (1671年)か	方一間、単層、切妻造、妻入、板葺、石造	1, 5

注：木廟1～4の桁行と梁間は、芯々寸法を示す。また、向拝は含まない。
石廟の桁行と梁間は、外法寸法を示す。

〔表3-4〕宝篋印塔の構造形式-2
 (位置番号は図3-2、出典は巻末表-1・2に符合する)

位置(北から)	世代・俗名	塔石質	塔高(cm)	台石(地輪)文字紋様	年代	出典
19 下段	23世高成	花崗岩	255	天祥院殿前若州大守仁藏道宅大居士 享保九丙辰歲 六月二十二日	享保9年 (1724年)	18
20 下段	22世高豊	花崗岩	264	俊徳院殿傑山道英大居士 元禄七甲戌歲 五月十八日	元禄7年 (1694年)	18
21 下段	21世高和	花崗岩	252	寛文二年 九月十三日	寛文2年 (1662)	18
22 下段	20世忠高	花崗岩	288	玄要院殿 天慶道長大居士 前若州大守羽林忠高	—	18
23 下段	25世高中	花崗岩	239	大暲院殿古若州使君覺法道大居士 文化八辛未歲 正月十三日	文化8年 (1811年)	18
24 下段	24世高矩	花崗岩	227	大機院殿前作州大守直翁道載大居士 宝曆十三癸未歲 九月二十四日	宝曆13年 (1763年)	18
30 下段	多度津藩 初代高通	花崗岩	215	円通院殿寂翁道静大居士(正面) 京極壹岐守 源高道墓(左側面) 寛保三 癸亥 四月 廿日(右側面)	寛保3年 (1743年)	20
31 下段	多度津藩 2代高慶	花崗岩	213	泰康院殿安禅道寧大居士(正面) 京極出羽守源高慶墓(左側面) 宝曆六 丙子 二月 廿六日(右側面)	宝曆6年 (1756年)	20
32 下段	多度津藩 3代高文	花崗岩	208	良俊院殿前豊州太守英山道雄大居士(正面) 京極図書頭源高文(左側面) 寛政八 辰 十月 十四日(右側面)	寛政8年 (1796年)	20
33 下段	多度津藩 4代高賢	花崗岩	201	玄州院殿前豊州太守鶴翁道寿大居士(正面) 京極□□守高賢(左側面) 天保九 戊戌年 三月 六日(右側面)	天保9年 (1838年)	20
34 下段	多度津藩 5代高球	花崗岩	206	雲閑院殿前豊州太守透翁道信大居士(正面) □□京極大隅守高球(左側面) 慶応三 丁卯歲 三月 廿二日(右側面)	慶應3年 (1867年)	20



〔写真3-44〕門



〔写真3-45〕階段



〔写真3-46〕上段石積

(2) 史跡の風致景観を構成する要素

上段と下段の間に位置する斜面には、モミジやナツツバキなどの落葉樹や、ナナミノキやツクバネガシなどの常緑樹がある。高木の林床には、キンランやギンリョウソウなどの草本類がある。下段にはツツジなどの低木類が植栽されている。



〔写真3-47〕上・下段間の斜面部



〔写真3-48〕下段の平坦部

(3) 史跡の管理に必要な要素

指定地域内の雨水排水は、門の南より墓所外の水路へ流出している。

(4) 史跡の活用に必要な要素

指定地内には、墓石ごとに個別の説明板が設置されている。上段の階段下には上段の説明板と注意喚起板が設置されている。



【写真3-49】排水路（門東から）



【写真3-50】排水路（門北西から）



【写真3-51】案内板（階段下段）

第2項 史跡指定地域外

(1) 史跡の本質的価値を補完する要素

① 史跡の歴史の経緯を示す要素

現在の徳源院境内の伽藍配置は、東に表門があり、門の正面に本堂、本堂の北に庫裏、本堂の南に位牌堂、位牌堂の東に三重塔、西に墓所がある。

①-1 徳源院本堂

・徳源院本堂は、北に庫裏、南に位牌堂が隣接し、廊下で接続している。現在の本堂は平成14年（2002年）に庫裏とともに改修された。改修の際には鬼瓦から文政11年（1828年）の年号が確認された。寄棟造で正面に御向拝を有し、旧本堂の向拝柱や木鼻、蟻股などの意匠を踏襲している。漆喰真壁で正面は格子戸とし、その両脇は舞良戸としている。本尊聖観世音立像は、恵心僧都御作、不動明王は智證大師御作、毘沙門天は運慶御作と伝えられ、御三体を厨子に納めている。



【図3-3】構成要素位置図（1：1,000）



【写真3-52】徳源院本堂



【写真3-53】廊下